

大学における教師—学生の間関係（I）

大橋正夫 吉田俊和¹⁾ 坂西友秀²⁾

戦後、我が国における大学の量的な拡大は驚異的な伸びを示し、1965年には高校卒業者の大学進学率が25.4%、特に男子では30%を超え、大学の大衆化時代が到来した。それに伴って、“大学生の質的低下”や“マスプロ教育の弊害”が叫ばれ、大学における教師と学生の間関係の稀薄化が取り沙汰されるようになった。その象徴的な現象が、1960年代の終りから70年代初頭にかけて、全国の大学を席捲したいわゆる大学紛争である。もちろん、この現象を西欧文明社会に共通した世代間闘争とみるような立場（永井、1968）もあれば、我が国では“70年安保”といった特異な政治状況の産物とする見方もある。しかし、多くの大学でノンセクトと呼ばれた非政治的な学生達が大学教師に問うたものは、“大学とは何か”、“学問とは何か”といった大学教育の本質にかかわる問題であったことも忘れてはならないであろう。換言すれば、学生の間根強い大学教育への不満があったからこそ、紛争が広範な拡がりを見せたともいえよう。その後、紛争は大学から高校へと波及し、現在では形を変えて、中学生の教師への反乱となって現れている。中学生の問題については、様々な視点から多様な議論が涌出しているが、確実なのは、彼らが何年後には大学生になることである。そして、大学教師はこれらの学生の教育に直面せねばならないのである。

では、現在の大学に、中学生時代から教師や学校教育に対して不信の念を抱いている学生を教育していくだけの対応力はあるのかといえ、残念ながら悲観的な見方を取らざるをえない。紛争直後に、いくつかの大学では改革委員会が設置され、大学教育のあり方が論議されたが、紛争の沈静化とともに、それらは中途半端な形で終わってしまい、本質的な解決策が見出されたとは言い難い。紛争後、確かに学生はおとなしくなっている。しかし他方では、“最近の学生は覇気がない”、“しらけている”、“手応えがない”といった大学教師からの学生批判が始め、“以前の学生は……”といった懐古的なつぶやきさ

え聞こえてくるのである。これは、明らかに責任回避であり、新しい時代に即応した大学教育への模索を怠った大学教師側にも責任の一端はあるはずである。こうした反省がないまま、いたずらに教師と学生の相互不信が増幅されれば、たんなる単位認定者と修得者といった人間関係のみが出来上がり、大学教育に未来はないものと思われる。紛争後10年が経過し、大学進学率も頭打ち現象を見せ始め、紛争世代も大学教師になり始めてきた現在こそ、もう一度新しい大学教育のあり方を考える時期なのではないだろうか。

われわれは、こうした問題を念頭においた場合、まず最初に、大学における教師—学生の間関係を取り上げることが有意義であると考え。ところが、小・中・高等学校における教師—生徒関係を扱った研究は数多くみられるが、大学に関するこの種の研究は、われわれの知る限りではほとんど皆無である。この理由のひとつは、学問研究こそが大学教師の使命であるとする考え方であり、いまひとつは、大学教師を研究対象とすることのタブー視である。しかしながら、ほとんどの大学教師は現実に学生の教育に携わっているものであり、新しい大学教育のあり方を模索していくためには、この種の研究は不可欠のものと考えられる。

それでは、どのような観点から教師—学生の間関係を捉えていくのかという問題が出てくるが、これに関しては、野村ら（1973）の分類が参考となる。彼らは、教師—生徒関係を扱った既存の研究を次の4タイプに分類している。

- (1) 小集団研究におけるリーダーとフォロアー関係のシエマを基礎に教師—生徒関係をとらえようとするもの。
- (2) 親子関係研究の延長として、親の養育態度の類型とそれに対する子どもの反応の関係を、教師—生徒関係におきかえているもの。
- (3) 対人認知の観点から、教師についての認知像や理想像と、それらに反映する生徒の教師観を明らかにしようとするもの。
- (4) 世代論的立場から、現代の教師—生徒間の人間関

1) 名城大学教職課程部講師

2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）

係の断絶を解釈しようとするもの。

このうち、大学における教師—学生の間関係を扱う場合、(3)および(4)のタイプが主流になるのは必然であり、本研究では特に(3)の観点から論を進めていきたいと考える。具体的には、第1報として、現在の大学生がもっている大学教師像の実態を浮き彫りにし、それと同時に、大学教師がそれをどの程度正確に把握しているかを明らかにしようとするものである。

ところで、小・中・高校生に対して(3)の観点から行われている調査は、主として教師のイメージを測定していることが特徴的である。例えば、田中教育研究所(1970)が行った調査は、好きな教師像・嫌いな教師像を、菊池(1972)は、理想的な教師像を、それぞれ被調査者との関係で捉えようとするものである。しかし、現実の間関係を問題にする場合、その関係は、やはり認知・感情・行為傾向といった成分を含む对人的態度として考える必要がある。そこで本研究は、大学生のもっている大学教師像を、この態度の3成分から明らかにしていきたいと考える。

方 法

1 予備調査

調査項目選定のための参考資料を得るため、教育心理学の受講学生に態度の3成分についての説明を行い、自

分が知っている大学教師(以下、教師と呼ぶ)に関して、それぞれの成分ごとに自由記述をさせた。対象学生は1~3年生約80名である。

2 調査項目の作成

予備調査の結果を参考にしながら、各成分ごとに対応する項目を作成した。項目内容は、認知的成分が、教師の教育者・研究者・社会人としての各側面およびパーソナリティに関する20項目であり、表4に示される。感情的成分は、教師に対する positive または negative な感情を表す各4項目(計8項目)から成り、表6に示される。行為傾向成分は、学生が教師と具体的な接触関係をどの程度もっているか(現実)、またもちたいと望んでいるか(願望)の合計24項目であり、表8に示される。いずれの項目も5点尺度である。ただし、認知的成分の項目だけは、「わからない」という回答を認めている。さらに、学生が教師のもっている価値観をどのようにみているかを調べるため、Sprangerの価値の6類型に説明を加え、順位評定を求めている。同順位も可とした。

3 調査Iの実施

愛知県および三重県の6つの大学と短期大学の学生に対し、1982年1月から2月にかけて実施した。評定の対象となる教師は、学生がこれまでに講義や演習を受けた

表1 調査Iの被験者の構成(学生)

大学	性 別			学 年						計
	男	女	不明	1年	2年	3年	4年	大学院	無記入	
A	96	15	0	36	42	0	21	12	0	111
B	96	102	0	90	102	6	0	0	0	198
C	0	510	0	300	0	81	123	0	6	510
D	0	141	0	138	0	0	0	0	3	141
E	651	0	0	183	0	465	0	0	3	651
F	664	54	1	377	24	305	10	3	0	719
全体 (%)	1507 (64.7)	822 (35.3)	1 (0.0)	1124 (48.2)	168 (7.2)	857 (36.8)	154 (6.6)	15 (0.6)	12 (0.5)	2330 (100.0)

表2 調査Iの被評定者の構成(教師)

年代 性	20代	30代	40代	50代	60代 以上	無記入	計
男	53	553	530	412	273	13	1834
女	15	91	54	58	6	0	224
無記入	5	60	66	66	38	37	272
全体 (%)	73 (3.1)	704 (30.2)	650 (27.9)	536 (23.0)	317 (13.6)	50 (2.1)	2330 (100.0)

教師の中から、ランダムに3名抽出させる手続きをとり、特定の教師だけが評定対象となるのを避けた。所要時間は約30分であった。実施大学別の被験者構成と被評定者である教師の性・年代別構成を表1と表2に示す。ただし、同一被験者が3名の教師を評定しており、それぞれを独立した標本として扱っているため、表1の数値は、実際の被験者数の約3倍となっている。参考までに各大

学の被験者特徴を述べておくと、A大学は、国立の総合大学であり、調査対象となった学生は理科系の教職課程受講者である。B大学も国立であり、調査対象は教育学部の学生である。C大学は私立女子大学で、調査対象は教育学と心理学の受講生である。D大学はミッション系の私立女子短期大学で、調査対象は人間関係科に所属する学生である。E大学は私立工業大学で、心理学の受

表3 調査Ⅱの被験者の構成（教師）

大学	性 別			年 代						計	発送数
	男	女	不明	20代	30代	40代	50代	60代以上	無記入		
A	227	2	16	2	39	68	99	34	3	245	440
B	29	4	1	1	8	11	9	5	0	34	93
C	13	15	2	0	11	6	2	8	3	30	50
D	9	3	0	0	4	4	2	2	0	12	25
E	51	0	1	1	21	8	10	11	1	52	101
F	93	1	8	1	23	26	26	25	1	102	193
G	40	2	2	0	17	15	8	3	1	44	85
H	19	13	2	2	7	7	4	13	1	34	65
全体 (%)	481 (87.0)	40 (7.2)	32 (5.8)	7 (1.3)	130 (23.5)	145 (26.2)	160 (28.9)	101 (18.3)	10 (1.8)	553 (100.0)	1053

表4 認知的成分の因子構造（学生）

項 目	因 子				h ²
	I	II	III	IV	
1 理知的である	.14	.67	.23	-.06	.52
2 心が暖かい	.48	.45	.10	-.43	.62
3 自分自身に対して厳しい	.22	.58	.21	.13	.45
4 独断的である	-.14	-.15	.03	.70	.54
5 専門的知識に優れている	.09	.64	.35	.03	.54
6 幅広い知識をもっている	.28	.57	.31	-.03	.51
7 教え方がうまい	.45	.55	.10	-.26	.58
8 熱心に教える	.35	.60	.07	-.21	.53
9 授業時間がルーズである	-.00	-.28	.02	.13	.10
10 単位や出席に対して厳しい	-.00	.04	-.01	.41	.17
11 学生と気軽に話す	.66	.21	.08	-.26	.55
12 優れた研究業績をもっている	.14	.21	.85	-.00	.78
13 熱心に研究している	.21	.38	.63	.00	.59
14 学界（専門分野）での地位が高い	.16	.17	.80	.03	.69
15 学生から人気があり、尊敬されている	.60	.36	.22	-.33	.65
16 経済的に恵まれている	.34	.04	.39	.13	.29
17 考え方が古い	-.15	-.11	.10	.40	.20
18 趣味が豊かである	.61	.04	.23	.06	.43
19 精神的に健康である	.58	.29	.12	-.15	.45
20 人づきあいが上手である	.75	.16	.16	-.12	.63
寄 与 率 (%)	31.82	9.16	4.93	3.24	49.15

講学生を対象としている。F大学は私立の総合大学で、調査対象は全学の教職受講学生である。調査対象となった学生全体では、男女比が2:1に近いし、学年別でも1年生と3年生が多いという片寄りがみられるが、本研究では一応、全体を大学生の代表サンプルとして取り扱っていく。また、表2の被評定者である教師の年代は、学生が推測した年齢であることをつけ加えておく。

4 調査Ⅱの実施

本研究は、大学生のもつ教師像を浮き彫りにすると同時に、教師がそれをどの程度正確に把握しているかを明らかにしようとするのも目的としている。したがって、学生用の質問紙を教師用に改変し、各項目に対し、自分が現在教えている学生が答えたかすると、その平均的な回答はどんなものであるかを推測してもらおうという方法をとった。調査の対象は、前述の6校に私立大学2校を加えた8校の教師である。D短大は小規模校であるため、全員の教師を対象としたが、残りの大学は、ランダムに約3分の2の教師を対象として選んだ。郵送調査による大学別の発送人数と回答人数および有効回答者の性別・年代別構成は表3に示されている。有効回収率は52.5%

であった。なお、調査の期間は1982年5月中旬から6月初旬であった。

結 果

1 調査項目の検討

結果の記述に先立ち、調査項目内容の検討を試みる。まず、認知的成分を表す20項目について、学生(調査Ⅰ)と教師(調査Ⅱ)の回答結果ごとに因子分析を行った。主因子法・ヴァリマックス回転を行った結果、それぞれ表4と表5のような因子構造が得られた。学生の結果を示す表4をみると、第Ⅰ因子は、項目番号(以下Naで表す)2, 7, 11, 15, 18, 19, 20に高く負荷している。これらは人間的取りつきやすさを表すものと考えられるので、「社会的近づきやすさ」の因子と呼ぶことにする。第Ⅱ因子は、Na 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8の各項目に高く負荷している。これらは知性や教え方を示すものと考えられるので、「教師としての望ましさ」の因子と名づける。第Ⅲ因子は、Na 12, 13, 14に負荷量が高く、研究的側面を示しているため、「アカデミズム」の因子と命名する。第Ⅳ因子は、Na 2, 4, 10, 17に高く負荷している。これらは、教師の権威的側面を表すものと考えられ、「権威主義」因子と名づ

表5 認知的成分の因子構造(教師)

項 目	因 子				h ²
	I	II	III	IV	
1 理知的である	.50	.16	.16	.25	.37
2 心が暖かい	.20	.63	.07	.03	.44
3 自分自身に対して厳しい	.39	.12	.43	.30	.44
4 独断的である	.08	-.02	-.08	.45	.21
5 専門的知識に優れている	.70	.20	.07	.17	.57
6 幅広い知識をもっている	.44	.37	.07	.21	.39
7 教え方がうまい	.42	.43	.35	.05	.49
8 熱心に教える	.37	.39	.56	.11	.63
9 授業時間がルーズである	-.05	.10	-.46	.26	.29
10 単位や出席に対して厳しい	-.02	.09	.55	.04	.33
11 学生と気軽に話す	.09	.65	-.00	-.12	.47
12 優れた研究業績をもっている	.89	.13	-.01	-.14	.85
13 熱心に研究している	.74	.16	.17	.02	.63
14 学界(専門分野)での地位が高い	.77	.14	-.04	-.13	.68
15 学生から人気があり、尊敬されている	.39	.59	.15	-.10	.57
16 経済的に恵まれている	.07	.28	.14	.17	.47
17 考え方が古い	-.07	-.17	.12	.40	.27
18 趣味が豊かである	.08	.60	.01	.08	.39
19 精神的に健康である	.20	.53	.27	-.11	.42
20 人づきあいが上手である	.11	.68	-.02	-.05	.50
寄 与 率 (%)	27.68	7.78	5.25	3.73	44.44

ける。

同様に、教師の結果を示す表5をみると、第Ⅰ因子は、No. 1, 6, 7, 12, 13, 14 に高く負荷している。これらの項目には、学生の結果で見出された「アカデミズム」の因子と「教師としての望ましさ」の因子項目が混ざっており、2つの因子が合併した形となっている。しいていえば、学生での「アカデミズム」の因子に近い。このことは、学生が研究的側面と教育的側面を分離させているのに対し、教師が、研究面での望ましさをそのまま教育面での望ましさのみなしていることの反映であろう。第Ⅱ因子は、No. 2, 7, 11, 15, 18, 19, 20 で負荷量が高く、学生の結果で見出された「社会的近づきやすさ」の因子と完全に対応している。第Ⅲ因子は、No. 3, 8, 9, 10 に高く負荷している。これらは教育的姿勢を示すものであり、いわば「教育的熱心さ」の因子と解釈できよう。第Ⅳ因子は、

No. 4, 17 に負荷量が高く、「権威主義」因子と名づけられる。このように、学生の方で見出された「教師としての望ましさの因子」が、教師の方では「教育的熱心さの因子」と「アカデミズム」の因子に分かれているものの、両者の因子構造に大きな違いはないと考えられる。したがって、以下の分析では一応、学生の結果で抽出された4つの因子を用いていくことにする。

次に、感情的成分を表す8項目間の内部相関を算出したものが表6, 表7である。学生の結果を示す表6では、No. 28の「畏怖」を除いて、いずれも項目間の相関はかなり高くなっている。教師の結果を示す表7では、positive項目とnegative項目間の相関係数が、学生のそれに比べて低い値となっている。しかし、全体得点と各項目間の相関では、やはり「畏怖」を除いて高くなっている。こうしたことから、「畏怖」を除く7項目は、同一の成分

表6 感情的成分を表す項目間の相関係数(学生)

	尊敬	信頼	好感	親愛	反感	憎悪	不満	畏怖	全体
21 尊敬	—	***	***	***	***	***	***	n.s.	***
22 信頼	.84	—	***	***	***	***	***	***	***
23 好感	.76	.79	—	***	***	***	***	***	***
24 親愛	.69	.75	.83	—	***	***	***	***	***
25 反感	.47	.50	.60	.50	—	***	***	***	***
26 憎悪	.47	.47	.55	.45	.74	—	***	***	***
27 不満	.51	.53	.60	.52	.76	.67	—	***	***
28 畏怖	.03	.08	.18	.14	.37	.41	.33	—	***
全体	.79	.82	.88	.81	.81	.77	.80	.40	

*** : $p < .001$

表7 感情的成分を表す項目間の相関係数(教師)

	尊敬	信頼	好感	親愛	反感	憎悪	不満	畏怖	全体
21 尊敬	—	***	***	***	n.s.	n.s.	***	***	***
22 信頼	.62	—	***	***	n.s.	n.s.	***	*	***
23 好感	.54	.61	—	***	***	*	***	n.s.	***
24 親愛	.45	.55	.77	—	***	*	***	n.s.	***
25 反感	.06	.08	.17	.14	—	***	***	***	***
26 憎悪	.07	.07	.10	.10	.65	—	***	***	***
27 不満	.21	.17	.26	.24	.49	.37	—	***	***
28 畏怖	-.20	-.10	.06	.06	.39	.36	.26	—	***
全体	.53	.59	.71	.68	.63	.58	.63	.44	

* : $p < .05$ *** : $p < .001$

表 8 行為傾向成分の因子構造 (学生)

項 目	因 子				h ²
	I	II	III	IV	
29 悩みを相談する	.74	.23	.08	.01	.61
30 考え方や生き方を学ぶ	.54	.37	.22	.15	.49
31 スポーツやゲームを楽しんだり、コンパをしたりする	.74	.22	.02	.05	.59
32 研究室に気楽に出入りする	.80	.21	.11	.02	.70
33 社会問題や政治問題を語り合う	.74	.12	.05	.07	.57
34 人間的に対等に近いつき合いをする	.72	.23	.11	.09	.59
35 アルバイトのあっせんをしてもらう	.62	.03	.03	.24	.44
36 大学生活のノウハウ(単位の取り方等)を教えてもらう	.57	.12	.19	.27	.44
37 授業の内容に関して質問する	.55	.12	.48	.04	.55
38 専門分野に関する指導をうける	.55	.12	.45	-.05	.52
39 講義に積極的に出席する	.10	.14	.61	-.03	.41
40 自主的な勉強会(自主ゼミ)と一緒にしている	.64	.15	.09	.03	.44
41 悩みを相談する	.25	.76	.23	.11	.70
42 考え方や生き方を学ぶ	.19	.79	.27	-.04	.74
43 スポーツやゲームを楽しんだり、コンパをしたりする	.28	.72	.13	.22	.66
44 研究室に気楽に出入りする	.21	.73	.35	.16	.72
45 社会問題や政治問題を語り合う	.21	.61	.20	.18	.49
46 人間的に対等に近いつき合いをする	.21	.70	.21	.25	.64
47 アルバイトのあっせんをもらう	.14	.40	.01	.59	.53
48 大学生活のノウハウ(単位の取り方等)を教えてもらう	.11	.39	.24	.55	.53
49 授業の内容に関して質問する	.12	.44	.67	.21	.71
50 専門分野に関する指導をうける	.17	.47	.65	.12	.68
51 講義に積極的に出席する	.00	.35	.74	.09	.67
52 自主的な勉強会(自主ゼミ)と一緒にする	.22	.59	.41	.18	.60
寄 与 率 (%)	39.42	11.49	5.03	2.53	58.48

を測定していると考えられる。それ故、以後の分析では、これら7項目を合計したものを感情的成分として用いていく。

最後に、行為傾向成分の項目検討をしてみよう。表8と表9は、現実の接触関係を表す12項目 (No.29~No.40) と、その願望を表す12項目 (No.41~No.52) の合計24項目の評定資料を、主因子法により因子分析しヴァリマックス回転した結果である。表8に示される学生の結果では、第I因子が、No.39を除いた現実項目に高く負荷することから「現実」因子と命名する。第II因子は、No.41以下の願望項目に負荷量が高いので、「願望」因子と名づける*。

同様に、表9に示される教師の結果では、学生でみられた2つの因子に対応する因子はみられず、現実項目とそれに対応する願望項目は一体化している。第I因子は、

No.37, 38, 39と49, 50, 51に高く負荷し、「知識享受」の因子と呼ぶことにする。第II因子は、No.31, 32, 34と43, 44, 46に負荷量が高く、気軽に一緒にやることを示す「表面的接触」因子とでも呼ぶべきものであろう。第III因子は、No.35, 36と47, 48で負荷量が高く、「実利」因子と命名する。第IV因子は、No.29, 30, 33と41, 42に高く負荷し、より深い接触を求める「内面的接触」因子と解釈された。

以上のように、行為傾向成分に関しては、両者の因子構造は大きく異なっている。この主な理由は、後述されるように、学生の現実項目に対する評定値がいずれも非常に低く、項目内容の弁別性よりも願望項目との違いが出てしまったためであると考えられる。このため、以下において両者を比較検討する場合には、学生で得られた2因子に、教師で得られた4因子を組み合わせた8カテゴリーを便宜的に用いていく。

* 表中には第IV因子まで示されるが、第II因子までの寄与率が非常に高いので、2因子構造とみなした。

表9 行為傾向成分の因子構造(教師)

項 目	因 子				h ²
	I	II	III	IV	
29 悩みを相談する	.17	.28	.21	.65	.60
30 考え方や生き方を学ぶ	.32	.22	.10	.58	.54
31 スポーツやゲームを楽しんだり、コンパをしたりする	.08	.67	.12	.29	.57
32 研究室に気楽に出入りする	.16	.65	.18	.22	.60
33 社会問題や政治問題を語り合う	.03	.27	.16	.42	.52
34 人間的に対等に近いつき合いをする	.01	.46	.23	.31	.45
35 アルバイトのあっせんをしてもらう	-.00	.09	.53	.31	.47
36 大学生活のノウハウ(単位の取り方等)を教えてもらう	.07	.14	.74	.18	.61
37 授業の内容に関して質問する	.56	.09	.23	.18	.41
38 専門分野に関する指導をうける	.56	.37	.08	.06	.61
39 講義に積極的に出席する	.66	.06	.01	.24	.52
40 自主的な勉強会(自主ゼミ)を一緒にしている	.32	.22	.04	.19	.62
41 悩みを相談する	.28	.24	.16	.52	.57
42 考え方や生き方を学ぶ	.40	.19	.09	.46	.64
43 スポーツやゲームを楽しんだり、コンパをしたりする	.23	.61	.08	.13	.54
44 研究室に気楽に出入りする	.34	.56	.19	.04	.62
45 社会問題や政治問題を語り合う	.21	.13	.18	.21	.56
46 人間的に対等に近いつき合いをする	.15	.40	.26	.12	.47
47 アルバイトのあっせんをしてもらう	.10	.13	.63	.10	.52
48 大学生活のノウハウ(単位の取り方等)を教えてもらう	.20	.16	.78	-.05	.72
49 授業の内容に関して質問する	.67	.06	.16	.04	.59
50 専門分野に関する指導をうける	.65	.29	.07	-.04	.61
51 講義に積極的に出席する	.68	.08	.01	.18	.53
52 自主的な勉強会(自主ゼミ)を一緒にする	.47	.21	.06	.04	.65
寄 与 率 (%)	33.82	7.50	5.49	3.68	50.49

表10 各成分の大学別および全体的傾向(学生)

成 分	大 学	A	B	C	D	E	F	全 体
		認 知	「社会的近づきやすさ」の因子	2.96 (0.97)	2.81 (0.97)	2.83 (0.97)	3.13 (0.87)	
知	「教師としての望ましさ」の因子	3.53 (0.76)	3.30 (0.84)	3.31 (0.92)	3.60 (0.73)	3.27 (0.87)	3.20 (0.92)	3.37 (0.89)
	「アカデミズム」の因子	3.02 (1.21)	2.66 (1.26)	3.11 (1.25)	3.00 (1.20)	2.85 (1.26)	2.55 (1.18)	2.87 (1.25)
感情	「権威主義」因子	2.57 (0.62)	2.62 (0.58)	2.86 (0.62)	2.71 (0.58)	2.89 (0.62)	2.77 (0.62)	2.74 (0.62)
	感 情	3.67 (0.78)	3.52 (0.85)	3.36 (0.96)	3.78 (0.74)	3.40 (0.90)	3.29 (0.97)	3.50 (0.93)
行為傾向	「現 実」因子	1.58 (0.50)	1.61 (0.53)	1.68 (0.65)	1.77 (0.57)	1.75 (0.68)	1.60 (0.64)	1.67 (0.64)
	「願 望」因子	2.48 (0.88)	2.52 (0.85)	2.54 (0.88)	2.71 (0.78)	2.77 (0.89)	2.54 (0.95)	2.59 (0.90)

() 内は標準偏差を示す。

2 調査 I の結果

(1) 各成分の全体的傾向

表10は、それぞれの応答にネガティブの方から1~5の数値を与えた上で、各成分の平均と標準偏差を大学別に表したものであり、右端に全体の結果が示される。これを見ると、「教師としての望ましさ」の因子や感情的成分でやや肯定的に評定されている以外は、ほとんど否定的に評定されており、教師に対して、かなりネガティブな対人的態度をもっていることがわかる。特に、現実の接触関係を表す「現実」因子の評定値は低く、教師との日常的接触はほとんどないことがうかがえる。この結果は、ある程度予測されたものとはいえ、これほど明確に表れるとは考えなかった。しかも、「願望」因子においてさえ、評定値はニュートラル・ポイントより否定的方向

に片寄っている。これは、現実の接触関係が稀薄であるというだけでなく、教師との接触さえ望まない傾向がかなり一般化していることを示唆するものである。

(2) 各成分間の関係

従来、態度の3成分の間には、方向および強度に関して、相互に斉合性を維持しようとする傾向のあることが明らかにされている。本研究でも、学生の教師に対する関係を教師に対する対人的態度と考えているので、この点について吟味する。表11は、各成分間の積率相関係数を算出したものである。これによると、「権威主義」因子を除く他の因子や成分の相互相関は、最低 $r = .28$ （「アカデミズム」の因子と「接触」の因子）、最高 $r = .76$ （「社会的近づきやすさ」の因子と感情的成分）となっており、いずれの値も有意である。そして過半数は、 $r >$

表11 各成分間の積率相関係数

	「社会的近づきやすさ」	「教師としての望ましさ」	「アカデミズム」	「権威主義」	感情	「現実」	「願望」
「社会的近づきやすさ」	—	***	***	n.s.	***	***	***
「教師としての望ましさ」	.74	—	***	***	***	***	***
「アカデミズム」	.42	.52	—	***	***	***	***
「権威主義」	.01	.10	.15	—	***	**	n.s.
感情	.76	.75	.34	-.17	—	***	***
「現実」	.43	.33	.28	.06	.40	—	***
「願望」	.57	.53	.31	-.02	.62	.57	—

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$

表12 大学間の t 値（「社会的近づきやすさ」の因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	n.s.	n.s.	n.s.	*	*
B	1.40	—	n.s.	***	n.s.	n.s.
C	1.31	0.30	—	***	n.s.	*
D	1.45	3.26	3.34	—	***	***
E	2.05	0.67	1.34	4.16	—	n.s.
F	2.62	1.45	2.44	4.75	1.16	—

* : $p < .05$, *** : $p < .001$

表13 大学間の t 値（「教師としての望ましさ」の因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	*	*	n.s.	**	***
B	2.43	—	n.s.	**	n.s.	n.s.
C	2.40	0.12	—	***	n.s.	*
D	0.76	3.50	3.53	—	***	***
E	2.92	0.32	0.60	4.18	—	n.s.
F	3.62	1.35	2.01	4.93	1.56	—

* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

表14 大学間の t 値（「アカデミズム」の因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	*	n.s.	n.s.	n.s.	***
B	2.33	—	***	*	n.s.	n.s.
C	0.63	3.99	—	n.s.	***	***
D	0.16	2.34	0.89	—	n.s.	***
E	1.27	1.75	3.29	1.20	—	***
F	3.73	1.05	7.52	3.89	4.29	—

* : p < .05, *** : p < .001

表16 大学間の t 値（「感情的成分」）

	A	B	C	D	E	F
A	—	n.s.	***	n.s.	**	***
B	1.49	—	*	**	n.s.	***
C	3.21	2.14	—	***	n.s.	n.s.
D	1.14	2.87	4.84	—	***	***
E	2.95	1.69	0.80	4.64	—	*
F	3.86	3.00	1.11	5.59	2.09	—

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

表18 大学間の t 値（「願望」因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	n.s.	n.s.	*	**	n.s.
B	0.33	—	n.s.	*	***	n.s.
C	0.58	0.27	—	*	***	n.s.
D	2.13	2.08	2.06	—	n.s.	n.s.
E	3.16	3.56	4.48	0.81	—	***
F	0.58	0.30	0.05	1.95	4.64	—

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

.50の値を示している。このことから、態度の3成分の間には斉合性が存在しているといえる。ただし、平均評定値からみた方向は、ニュートラルよりはむしろ否定的な態度といえよう。また、強度に関しては、行為傾向成分の「現実」因子だけが極に近いが、他の因子はいずれもニュートラル・ポイントに近づいている。

(3) 大学間の比較

表10の大学別平均値の差を t 検定により吟味した結果の要約は表12～表18に示してある。6つの大学の中ではDの教師が「社会的近づきやすさ」の因子で最も高く評

表15 大学間の t 値（「権威主義」因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	n.s.	***	n.s.	***	**
B	0.73	—	***	n.s.	***	**
C	4.39	4.59	—	**	n.s.	*
D	1.79	1.33	2.58	—	***	n.s.
E	5.05	5.45	0.94	3.25	—	***
F	3.10	2.95	2.49	1.07	3.70	—

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

表17 大学間の t 値（「現実」因子）

	A	B	C	D	E	F
A	—	n.s.	n.s.	**	*	n.s.
B	0.56	—	n.s.	*	**	n.s.
C	1.52	1.27	—	n.s.	n.s.	*
D	2.77	2.58	1.48	—	n.s.	**
E	2.55	2.61	1.81	0.30	—	***
F	0.35	0.25	2.09	2.90	4.19	—

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

定されている（表12）。また、「教師としての望ましさ」の因子でも、Dの教師は最も高く評定されている（表13）。「アカデミズム」の因子では、Cの教師が一番高く評定されている（表14）。「権威主義」因子では、Aの教師が最も低く評定され、C・Dの教師は比較的高く評定されている（表15）。

さらに、Dの教師は、「感情的成分」や「現実」因子でも一番高く評定されており（表16、表17）、「願望」因子においても、Eの教師と並んで高く評定されている（表18）。このように、Dは他大学に比べて一貫して特徴的な傾向を示している。これは、Dが少人数のグループ・ゼミや合宿を通じて、教師－学生の人間関係を重視する教育方針をとっているためと思われる。

(4) 被験者と被評定者の組み合わせによる比較

表19から、被験者の性差についてみると、「社会的近づきやすさ」の因子では、女子の方がより近づきやすいと評定し（ $t = 3.10, df = 2326, p < .002$ ）、「教師としての望ましさ」の因子では、より望ましいとみている（ $t = 2.89, df = 2326, p < .004$ ）。また、「アカデミズム」の因子では、その傾向が強いとみているし（ $t = 5.39, df = 2065, p < .001$ ）、「感情的成分」でも positive に評定している（ $t = 2.77, df = 2327, p < .006$ ）。

大学における教師—学生の間関係 (I)

表19 被験者×被評定者別にみた各成分の平均・標準偏差

成分		組み合わせ		男×男		男×女		女×男		女×女		全体×男		全体×女		男×全体		女×全体	
		男	女	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
認知	「社会的近づきやすさ」	2.75	3.16	2.78	3.09	2.76	3.09	2.74	2.87	(1.03)	(0.89)	(0.96)	(0.87)	(1.01)	(0.87)	(1.02)	(0.95)		
	「教師としての望ましさ」	3.27	3.21	3.32	3.46	3.28	3.44	3.25	3.36	(0.89)	(0.96)	(0.88)	(0.85)	(0.89)	(0.85)	(0.89)	(0.88)		
	「アカデミズム」	2.72	2.15	2.97	3.10	2.47	4.55	2.71	3.01	(1.25)	(0.89)	(1.23)	(1.29)	(1.48)	(1.45)	(1.23)	(1.25)		
	「権威主義」	2.80	2.69	2.74	2.90	2.79	2.89	2.80	2.79	(0.63)	(0.52)	(0.62)	(0.56)	(0.63)	(0.56)	(0.63)	(0.61)		
感情	感情	3.38	3.41	3.44	3.56	3.39	3.55	3.36	3.48	(0.93)	(0.96)	(0.91)	(0.87)	(0.93)	(0.87)	(0.93)	(0.91)		
行為傾向	「現実」	1.69	1.67	1.61	1.86	1.66	1.85	1.67	1.66	(0.66)	(0.50)	(0.54)	(0.71)	(0.63)	(0.70)	(0.66)	(0.60)		
	「願望」	2.66	2.51	2.45	2.80	2.60	2.78	2.65	2.54	(0.93)	(1.05)	(0.84)	(0.82)	(0.91)	(0.83)	(0.93)	(0.85)		

n = 1265 13 568 211 1834 244 1507 822
 () 内は標準偏差を示す。

表20 被評定者の年代別にみた各成分の平均・標準偏差

成分		年代				
		20代	30代	40代	50代	60代以上
認知	「社会的近づきやすさ」	2.81	2.84	2.80	2.71	2.77
	「教師としての望ましさ」	3.04	3.21	3.31	3.32	3.48
	「アカデミズム」	2.10	2.52	2.84	3.02	3.27
	「権威主義」	2.54	2.65	2.82	2.91	2.94
感情	感情	3.41	3.44	3.36	3.36	3.50
行為傾向	「現実」	1.73	1.72	1.65	1.65	1.60
	「願望」	2.64	2.66	2.65	2.57	2.50

() 内は標準偏差を示す。

表21 被評定者の年代間の t 値
 (「教師としての望ましさ」の因子)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
20代	—	n.s.	**	**	***
30代	1.75	—	*	*	***
40代	2.45	2.04	—	n.s.	**
50代	2.56	2.29	0.33	—	**
60代以上	3.75	4.75	2.87	2.49	—

* : p < .05, ** : p < .01, *** : p < .001

表22 被評定者の年代間の t 値
 (「アカデミズム」の因子)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
20代	—	*	***	***	***
30代	2.93	—	***	***	***
40代	4.67	4.72	—	*	***
50代	5.31	6.86	2.40	—	*
60代以上	6.39	8.84	4.76	2.44	—

* : p < .05, *** : p < .001

一方、男子は女子よりも、「願望」因子の評定値が高く、教師との接触の願望を強くもっている ($t=2.89$, $df=2327$, $p<.004$)。

被評定者による差では、女性教師の方が男性教師よりもポジティブに評定される傾向がある。ただし、男子学生と女性教師の組み合わせは極めて少ないので、この結果は、男女を通じての一般的傾向と断定することはできない。

(5) 被評定者の年代別比較

教師自身もっている教育観・大学観の違いは、学生が当該教師にもつ対人的態度の中に反映されてくるのは当然である。そこで、一つの重要な指標として、教師の推定された年齢による差異を検討する。表20は、被評定者である教師の年代別に、各成分の平均と標準偏差を示したものである。これをみると、30代の教師が学生にとって最も近づきやすく、50代の教師が最も近づきにくいとみられている。両者の差は有意である ($t=2.34$, $df=1238$, $p<.02$)。他方、「教師としての望ましさ」の因子では、60代の教師が一番高く評定されており、20代の教師が一番低く評定されている(表21)。教師の年代が上がるにつれて、望ましさも直線的に上昇していることは興味深い。これは、教育者としての側面が、単なる近づきやすさとは異なり、長年の経験と豊かな知識に裏打ちされていることが必要なのであろう。同様の傾向は、「アカデミズム」の因子や「権威主義」因子でも認められ、教師の年代が高くなるにつれて、それらの傾向が強くなっている(表22, 表23)。「感情的成分」では、年代による差異はほとんどみられない。

現実の接触関係を示す「現実」因子では、30代と60代

表23 被評定者の年代間のt値(「権威主義」因子)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
20代	—	n.s.	***	***	***
30代	1.54	—	***	***	***
40代	3.72	5.53	—	*	**
50代	4.43	7.45	2.22	—	n.s.
60代以上	5.05	7.60	2.84	0.82	—

* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

の間に有意差がみられるだけで ($t=2.54$, $df=1019$, $p<.01$)、年代による差はあまりない。このことは、この因子を表す各項目の評定値そのものが低く、接触がほとんどないことに帰因する。また、教師との接触の願望では、30代と60代および40代と60代の間で差がみられ ($t=2.58$, $df=1019$, $p<.01$; $t=2.56$, $df=965$, $p<.01$)、他の年代間に差はみられない。

(6) 学生が推定した教師の価値観

本研究は、教師がもつ価値観を学生がどう判断しているかをみるため、Sprangerの価値の6類型を調査項目につけ加えた。表24は、学生が推定した各価値の平均順位と標準偏差を大学別・男女別に示したものである。全体的な傾向としては、理論に最も高い価値を、宗教に最も低い価値を置くかと推定されている。大学は大衆化したとはいえ、やはり大学教師は学問・研究に最も価値を置いている人間と判断されているようである。また、被験者の性によって推定する価値の強さに違いがみられる。男子は女子に比べて、経済的価値や権力的価値を教師が重視する

表24 学生が推定した教師の価値観の平均・標準偏差

大学 価値	A	B	C	D	E	F	男子	女子
経済	3.69 (1.30)	3.65 (1.34)	3.46 (1.58)	4.39 (1.21)	3.07 (1.46)	3.12 (1.53)	3.17 (1.49)	3.63 (1.53)
理論	1.60 (0.91)	1.93 (1.22)	1.91 (1.45)	1.78 (1.04)	2.14 (1.45)	2.67 (1.41)	2.15 (1.41)	1.90 (1.14)
審美	3.41 (1.37)	3.35 (1.57)	3.75 (1.43)	3.53 (1.30)	3.85 (1.40)	3.86 (1.43)	3.80 (1.43)	3.64 (1.43)
権力	4.53 (1.33)	4.41 (1.45)	4.07 (1.63)	4.97 (1.37)	3.63 (1.58)	3.92 (1.64)	3.86 (1.61)	4.28 (1.60)
社会	2.94 (1.49)	2.89 (1.42)	3.18 (1.51)	2.59 (1.25)	3.44 (1.42)	3.11 (1.47)	3.22 (1.45)	3.04 (1.48)
宗教	4.84 (1.29)	4.76 (1.33)	4.64 (1.35)	3.73 (1.60)	4.88 (1.44)	4.73 (1.41)	4.80 (1.41)	4.51 (1.44)

() 内は標準偏差を示す

大学における教師—学生の人間関係 (I)

と推定している ($t = -7.09, df = 2324, p < .001$; $t = -6.14, df = 2324, p < .001$)。次に、大学による違いをみてみると、各成分について

見いだされたのと同様、ここでもDの教師が他大学に比べて、かなり特徴的なパターンを示している。すなわち、経済的価値・権力的価値を低位に置き、宗教的価値・社

表25 各成分の大学別・性別および全体的傾向 (教師による推定)

成分		大学								男子	女子	全体†
		A	B	C	D	E	F	G	H			
認	「社会的近づきやすさ」	2.84 (0.80)	2.92 (0.71)	3.07 (0.70)	2.82 (0.65)	2.87 (0.79)	2.97 (0.78)	3.09 (0.73)	3.06 (0.82)	2.90 (0.78)	2.96 (0.67)	2.93 (0.78)
	「教師としての望ましさ」	3.24 (0.76)	3.31 (0.66)	3.35 (0.62)	3.19 (0.51)	3.20 (0.80)	3.39 (0.69)	3.36 (0.67)	3.30 (0.80)	3.29 (0.74)	3.13 (0.66)	3.21 (0.73)
知	「アカデミズム」	3.14 (1.04)	2.84 (0.95)	2.54 (0.76)	2.21 (0.73)	2.81 (1.05)	2.70 (1.01)	2.97 (0.83)	2.59 (1.13)	2.92 (1.02)	2.45 (1.04)	2.69 (1.25)
	「権威主義」	2.67 (0.64)	2.79 (0.56)	2.94 (0.59)	2.85 (0.36)	2.86 (0.59)	2.84 (0.61)	2.83 (0.50)	3.05 (0.57)	2.77 (0.61)	2.91 (0.68)	2.85 (0.62)
感情	感情	3.56 (0.48)	3.64 (0.52)	3.67 (0.50)	3.48 (0.40)	3.46 (0.56)	3.63 (0.50)	3.62 (0.48)	3.65 (0.53)	3.57 (0.50)	3.56 (0.43)	3.57 (0.83)
行為傾向	「知識享受」	3.26 (0.65)	3.27 (0.43)	3.61 (0.66)	3.27 (0.63)	3.01 (0.74)	3.27 (0.77)	3.25 (0.67)	3.26 (0.81)	3.27 (0.64)	3.39 (0.80)	3.33 (0.66)
	「表面的接触」	2.99 (0.81)	3.05 (0.76)	3.29 (0.85)	3.03 (0.69)	2.70 (0.75)	2.99 (0.83)	3.13 (0.83)	3.13 (0.80)	3.04 (0.80)	3.03 (0.89)	3.04 (0.81)
	「実利」	2.85 (0.74)	2.85 (0.66)	3.07 (0.85)	2.89 (0.72)	2.98 (0.81)	2.87 (0.80)	2.86 (0.78)	2.90 (0.62)	2.86 (0.72)	2.83 (0.76)	2.85 (0.73)
	「内面的接触」	3.12 (0.72)	2.97 (0.65)	3.28 (0.83)	3.02 (0.72)	3.00 (0.86)	3.03 (0.82)	2.97 (0.76)	3.01 (0.77)	3.07 (0.74)	3.00 (0.83)	3.04 (0.75)

† 全体は男女を合わせた平均を示す。() 内は標準偏差を示す。

表26 各成分間の積率相関係数

	「社会的近づきやすさ」	「教師としての望ましさ」	「アカデミズム」	「権威主義」	感情	「知識享受」	「表面的接触」	「実利」	「内面的接触」
「社会的近づきやすさ」	—	***	***	***	***	***	***	***	***
「教師としての望ましさ」	.74	—	***	***	***	***	***	***	***
「アカデミズム」	.42	.59	—	***	***	***	***	***	***
「権威主義」	.38	.43	.16	—	n.s.	***	***	***	***
感情	.57	.50	.37	.01	—	***	***	***	***
「知識享受」	.40	.38	.34	.16	.35	—	***	***	***
「表面的接触」	.50	.29	.19	.17	.36	.58	—	***	***
「実利」	.51	.40	.35	.20	.43	.63	.67	—	***
「内面的接触」	.34	.30	.30	.14	.28	.75	.68	.74	—

*** : $p < .001$

会的価値を高位に置くと推定されている。これらの価値項目については、いずれも他大学との間に有意な差が検出される。この理由は、前述の教育方針による差異というよりも、Dがミッション系の大学であり、宗教色が強いことによる影響と思われる。

3 調査Ⅱの結果

(1) 各成分の全体的傾向

表25は、各成分の平均と標準偏差を大学別・性別に表したものであり、右端に全体の結果が示される。これを見ると、認知的成分の「社会的近づきやすさ」の因子や「アカデミズム」因子および行為傾向成分の「実利」因子で、わずかに否定的な評定値を予測しているものの、他は肯定的な評定値を予測している。特に、感情的成分、認知的成分の「教師としての望ましさ」の因子、行為傾向成分の「知識享受」因子にこの傾向が強い。このことから、教師は、学生のもっている対教師態度を少なくともニュートラルよりはポジティブな方向にあると認識して

いることがわかる。

(2) 各成分間の関係

表26は、態度の3成分間の積率相関係数を算出したものである。調査Ⅰの結果と同様、「権威主義」因子を除く他の因子や成分の相互相関は、最低 $r = .18$ （「アカデミズム」因子と「表面的接触」因子）、最高 $r = .75$ （「知識享受」の因子と「内面的接触」因子）となっており、いずれの値も有意である。もちろん、成分内の因子相互の相関は成分間のそれよりも高くなっている。成分間では、認知的成分と感情的成分の相関が最も強く表れている。以上のように、教師が、学生のもっている対教師態度を推測する場合においても、態度の3成分に斉合性をもたせた評定を行っていることがわかる。

(3) 大学間の比較

認知的成分の「社会的近づきやすさ」因子や「教師としての望ましさ」因子では、大学間に差は認められない。「アカデミズム」因子では、Aの教師が最も高く評定している（表27）。これは、Aが国立の総合大学であり、こ

表27 大学間のt値（「アカデミズム」の因子）

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	—	**	**	**	*	***	n.s.	**
B	2.76	—	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
C	2.75	1.17	—	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.
D	2.82	1.86	1.19	—	n.s.	n.s.	*	n.s.
E	2.00	0.14	1.01	1.66	—	n.s.	n.s.	n.s.
F	3.33	0.57	0.70	1.49	0.47	—	n.s.	n.s.
G	0.98	0.65	2.03	2.63	0.83	1.41	—	n.s.
H	3.06	1.18	0.70	0.80	1.10	0.84	1.95	—

* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

表28 大学間のt値（「知識享受」の因子）

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	—	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
B	1.18	—	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
C	2.83	2.46	—	*	*	*	*	*
D	1.28	1.49	2.58	—	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
E	0.15	0.01	2.02	1.07	—	n.s.	n.s.	n.s.
F	0.09	0.17	2.59	1.16	0.18	—	n.s.	n.s.
G	0.13	0.01	2.25	1.23	0.01	0.17	—	n.s.
H	0.05	0.06	2.00	1.04	0.06	0.09	0.05	—

* : $p < .05$

の地方の学術研究の中心的役割を果しているという教師側の自負心を反映したものとえよう。「権威主義」因子でも、Aの教師は、C・F・Hの教師より低く評定している（ $t=2.04$, $df=273$, $p<.05$; $t=2.62$, $df=345$, $p<.01$; $t=3.04$, $df=277$, $p<.01$ ）。

感情的成分では、いずれの大学の教師も、かなり肯定的な予測をもっており、大学間にも有意な差はみられない。また、行為傾向成分の「知識享受」の因子では、Cの教師が他大学の教師より高く評定している（表28）。この理由は定かではないが、おそらくCが女子大学であり講義等の出席率も良いことなどが、教師の推測に影響していると考えられる。その他の行為傾向成分では、大学間の違いはみられない。

（4）教師の年代別比較

教師が学生の態度を推測する場合、教師自身も持っている学生観の差異がそこに投影されてくるのは当然である。これを検討するため、一つの指標として教師の年代差を取り上げた。表29は、教師の年代別に、各成分の平均と標準偏差を示したものである。ただし、20代の教師のサンプル数7は、他の年代のそれと違いすぎるので、表中には示したが、比較の対象からは除外する。これを見ると、「社会的近づきやすさ」の因子では、年代による差異はみられないが、「教師としての望ましさ」の因子では、30代より50代・60代以上の教師の方が高く評定している（ $t=2.53$, $df=288$, $p<.02$; $t=2.22$, $df=229$, $p<.01$ ）。同じく、「アカデミズム」の因子や「権威主

表29 教師の年代別にみた各成分の平均・標準偏差

成分		年代				
		20代	30代	40代	50代	60代以上
認 知	「社会的近づきやすさ」	2.71 (1.01)	2.84 (0.69)	2.90 (0.80)	2.91 (0.79)	3.04 (0.82)
	「教師としての望ましさ」	2.90 (0.76)	3.17 (0.66)	3.22 (0.72)	3.39 (0.75)	3.38 (0.75)
	「アカデミズム」	1.94 (1.14)	2.61 (1.03)	2.74 (0.94)	3.18 (0.92)	3.07 (1.12)
	「権威主義」	2.50 (0.48)	2.67 (0.53)	2.73 (0.65)	2.80 (0.59)	3.00 (0.64)
感情	感 情	3.57 (0.40)	3.51 (0.46)	3.53 (0.46)	3.61 (0.48)	3.68 (0.59)
行 為 傾 向	「知識享受」	3.04 (1.07)	3.25 (0.57)	3.28 (0.63)	3.31 (0.65)	3.22 (0.77)
	「表面的接触」	2.86 (1.15)	3.08 (0.69)	3.16 (0.83)	2.67 (0.83)	2.93 (0.83)
	「実 利」	2.74 (1.08)	2.73 (0.61)	2.81 (0.67)	3.00 (0.78)	2.91 (0.75)
	「内面的接触」	3.04 (0.99)	3.02 (0.63)	3.06 (0.75)	3.10 (0.79)	3.02 (0.76)

（ ）内は標準偏差を示す。

表30 年代間の t 値（「アカデミズム」の因子）

	20代	30代	40代	50代	60代以上
20代	—	n.s.	*	**	*
30代	1.55	—	n.s.	***	**
40代	2.01	1.02	—	***	*
50代	3.21	4.79	4.04	—	n.s.
60代以上	2.40	3.14	2.47	0.82	—

* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

表31 年代間の t 値（「権威主義」の因子）

	20代	30代	40代	50代	60代以上
20代	—	n.s.	n.s.	n.s.	*
30代	0.81	—	n.s.	*	***
40代	0.91	0.84	—	n.s.	***
50代	1.32	2.00	1.02	—	**
60代以上	2.04	4.35	3.26	2.60	—

* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

表32 教師からみた学生が推定した教師の価値観

大学別・性別 価値	A	B	C	D	E	F	G	H	男性	女性	全体†
経済	3.71 (1.25)	4.02 (1.41)	4.06 (1.15)	5.00 (1.00)	3.55 (1.28)	3.42 (1.25)	4.05 (1.36)	4.06 (1.36)	3.76 (1.29)	3.85 (1.43)	3.81 (1.29)
理論	1.30 (0.67)	1.59 (0.95)	1.80 (1.15)	1.64 (0.81)	1.52 (0.90)	1.49 (1.02)	1.42 (0.73)	1.69 (1.07)	1.41 (0.83)	1.97 (1.16)	1.69 (0.86)
審美	3.54 (1.28)	3.17 (1.42)	2.98 (1.46)	2.96 (0.72)	3.65 (1.63)	3.57 (1.25)	3.48 (1.29)	2.62 (1.14)	3.51 (1.30)	2.62 (1.38)	3.07 (1.33)
権力	4.42 (1.23)	4.61 (1.42)	5.13 (1.46)	5.46 (0.69)	4.33 (1.26)	4.48 (1.42)	4.94 (1.09)	5.29 (0.78)	4.57 (1.28)	4.96 (1.03)	4.77 (1.26)
社会	2.78 (1.20)	2.83 (1.12)	2.59 (1.04)	2.46 (1.57)	2.84 (1.13)	2.82 (1.18)	2.56 (1.03)	2.90 (1.08)	2.75 (1.67)	2.91 (1.15)	2.83 (1.16)
宗教	5.23 (1.05)	4.79 (1.23)	4.44 (1.48)	3.50 (1.43)	5.11 (1.17)	5.23 (0.99)	4.56 (1.48)	4.44 (1.56)	5.01 (1.21)	4.69 (1.53)	4.85 (1.22)

() 内は標準偏差を示す。

† 全体は男女を合わせた平均を示す。

表33 経済的価値項目における大学間の t 値

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	—	n.s.	n.s.	***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
B	1.10	—	n.s.	*	n.s.	*	n.s.	n.s.
C	1.16	0.10	—	*	n.s.	*	n.s.	n.s.
D	3.33	2.22	2.45	—	***	**	n.s.	*
E	1.18	1.67	1.81	3.78	—	n.s.	*	n.s.
F	1.18	2.10	2.17	4.00	0.24	—	**	n.s.
G	1.84	0.42	0.32	1.96	2.27	2.83	—	*
H	1.43	0.22	0.13	2.08	1.94	0.19	2.40	—

* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

表34 権力的価値項目における大学間の t 値

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	—	n.s.	***	**	n.s.	n.s.	*	***
B	0.36	—	*	*	n.s.	n.s.	n.s.	**
C	3.22	2.16	—	n.s.	**	**	n.s.	n.s.
D	2.74	2.09	0.70	—	**	*	n.s.	n.s.
E	0.40	0.54	3.03	2.75	—	n.s.	*	***
F	0.20	0.19	2.61	2.29	0.45	—	n.s.	**
G	2.42	1.41	1.13	1.52	2.26	1.87	—	n.s.
H	3.95	2.77	0.35	0.57	3.79	3.24	1.66	—

* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

義」因子では、年代が上がるにつれて評定値が高くなる傾向がみられる(表30, 表31)。また、「感情的成分」では、30代・40代と60代以上の教師の間に差がみられ ($t = 2.51, df = 186, p < .02$; $t = 2.18, df = 180, p < .05$), 60代以上の教師の方が肯定的な感情を予測している。このように、認知的成分や感情的成分では、全体として年代が上昇するにつれ、肯定的な推測を行う傾向がみられる。

行為傾向成分では、「実利」因子で30代・40代と50代の間に有意な差がみられ ($t = 3.26, df = 287, p < .001$; $t = 2.26, df = 303, p < .03$), 50代の教師が学生の態度を最も実利的とみている。その他の因子では、年代による一貫した傾向は認められない。

(5) 教師からみた学生が推定した教師の価値観

学生が推定した教師の価値観を、教師がどのようにみているかを示したのが表32である。これによると、全体

としては理論的価値を最上位に、宗教的価値を最下位に評定しており、極めて常識的な結果となっている。大学別では、Dの教師がかなり特徴的である。Dの教師は他の大学の教師と比べて、経済的価値や権力的価値を低位に評定し(表33, 表34)、宗教的価値を高位に評定する傾向がみられる(表35)。これは、前述したように、Dがミッション系の女子短大であり、教師がそれを強く意識していることによる影響と考えられる。Gも同系列の大学であるが、このようなはっきりした傾向はみられない。これは、Gの方が、教師や学生数がはるかに多く、宗教色が薄いことによるのであろう。その他、Aの教師は権力的価値を上位に、宗教的価値を下位に評定し(表34, 表35)、Fの教師は経済的価値を上位に、宗教的価値を下位に評定する傾向がみられる(表33, 表35)。表36は、教師の年代別に同様のものを示しているが、年代間に有意な差は散見されるものの、一貫した傾向は認

表35 宗教的価値項目における大学間のt値

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	—	n.s.	***	***	n.s.	n.s.	***	***
B	1.53	—	n.s.	***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
C	3.50	1.44	—	n.s.	*	***	n.s.	n.s.
D	5.41	3.54	1.96	—	***	***	*	n.s.
E	0.39	0.93	2.39	4.39	—	n.s.	*	*
F	0.18	1.58	3.35	5.52	0.49	—	***	***
G	3.60	1.23	0.27	2.25	2.26	3.29	—	n.s.
H	3.89	1.53	0.08	1.85	2.52	3.58	0.37	—

* : $p < .05$, *** : $p < .001$

表36 教師の年代別にみた価値観の平均・標準偏差

価値	年代				
	20代	30代	40代	50代	60代以上
経済	3.07 (1.69)	3.66 (1.22)	3.73 (1.40)	3.88 (1.21)	3.77 (1.36)
理論	1.79 (1.47)	1.34 (0.77)	1.49 (0.84)	1.38 (0.75)	1.58 (1.08)
審美	3.29 (1.08)	3.39 (1.46)	3.39 (1.29)	3.48 (1.29)	3.49 (1.27)
権力	4.36 (0.75)	4.44 (1.19)	4.39 (1.35)	4.79 (1.22)	4.77 (1.28)
社会	2.86 (1.25)	2.97 (1.13)	2.93 (1.26)	2.47 (1.04)	2.77 (1.16)
宗教	5.64 (0.63)	5.21 (1.09)	5.08 (1.26)	4.99 (1.16)	4.61 (1.40)

() 内は標準偏差を示す。

め難い。

4 調査Iの結果と調査IIの結果の比較

これまでのところで、調査I・調査IIの結果を別々にみてきたが、ここで両者の比較検討を試みる。表37は、各成分について学生と教師の平均値の差の検定を行った結果である。行為傾向成分については、両者の因子構造に違いがあるので、前述したように8カテゴリーを便宜的に設定している。認知的成分では、「社会的近づきやすさ」の因子で有意な差がみられ、教師は学生の実際の評定値よりもより近づきやすいと評定されたものと予測している。その他の因子でも、わずかではあるが、教師の方がより肯定的な方向に評定する傾向がみられる。感情的成分では、両者とも好意的評定をしているが、教師の方がその傾向が強く表れている。行為的成分では、現実お

表37 各成分別にみた学生と教師の平均値の差の検定[†]

成分		評定者		t 値	
		学生	教師		
認 知	「社会的近づきやすさ」	2.78 (1.00)	2.92 (0.78)	2.96 **	
	「教師としての望ましさ」	3.29 (0.89)	3.29 (0.73)	0.13 n.s.	
	「アカデミズム」	2.82 (1.25)	2.91 (1.25)	1.56 n.s.	
	「権威主義」	2.80 (0.62)	2.78 (0.61)	0.40 n.s.	
感情	感 情	3.40 (0.93)	3.58 (0.50)	4.36 ***	
行 為 傾 向	現 実	「知識享受」	2.43 (0.98)	3.38 (0.73)	25.69 ***
		「表面的接触」	1.43 (0.76)	2.92 (0.92)	35.64 ***
		「実 利」	1.33 (0.61)	2.10 (0.92)	18.53 ***
		「内面的接触」	1.47 (0.68)	2.65 (0.80)	35.08 ***
	願 望	「知識享受」	3.01 (1.07)	3.47 (0.74)	11.89 ***
		「表面的接触」	2.40 (1.09)	3.21 (0.82)	19.28 ***
		「実 利」	2.19 (1.02)	2.67 (0.96)	10.47 ***
		「内面的接触」	2.60 (1.09)	3.21 (0.81)	14.72 ***

() 内は標準偏差を示す。 ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

† 平均値は、性別等無記入の被験者すべてを含めた値である。

よび願望の4因子いずれにも有意な差がみられる。接触関係の事実を質問している現実項目で、学生が極端に否定的な回答をしているのに、教師は、それほど否定的とは予測していない。また、願望項目でも、学生の評定値はニュートラル・ポイントを超えていないのに対し、教師はむしろ肯定的な回答を予測している。興味深いのは、「知識享受」の因子で、教師が現実よりも願望で低く評定していることである。つまり、知識の享受に関しては、かなり学生と接触関係をもっている（学生の評定値は否定的）が、学生はそれほど望んではいないだろうとする教師の見方が存在することである。以上のように、行為傾向成分については、教師と学生の間大きな認識のずれが生じている。結局、態度の3成分からみた学生の対教師態度は、かなりネガティブなものであるのに対し、教師が予測しているそれは、ややポジティブなものになっている。

同様の比較を価値項目について行った結果が表38である。これを見ると、理論・審美・社会の各価値では、教師の方が上位に評定するが、経済・権力・宗教の各価値では、学生の方が上位に評定している。いわば、教師は自分がより学者的な価値観をもった人間とみられていると予測するのにに対し、学生は教師をもう少し世俗的な価値観をもった人間とみている。ただし、6つの価値相互の順位は、審美と経済の3位・4位が入れ替わるだけで、大きな変動はない。

結 語

本研究は、今後の大学教育のあり方を考えていくために、大学における教師—学生の間人間関係を取り上げた。具体的には、態度の3成分により、学生がもっている教師像と、教師がそれをどの程度正確に把握しているかを調査した。調査のサンプルの偏りのため、結論の一般化

表38 価値項目別にみた学生と教師の
平均値の差の検定[†]

価値	評定者	学生	教師	t 値
経 済		3.33 (1.52)	3.76 (1.29)	6.69 ***
理 論		2.06 (1.32)	1.44 (0.86)	13.28 ***
審 美		3.75 (1.43)	3.42 (1.33)	4.91 ***
権 力		4.00 (1.62)	4.59 (1.26)	9.07 ***
社 会		3.16 (1.47)	2.77 (1.16)	6.55 ***
宗 教		4.70 (1.43)	5.01 (1.22)	5.03 ***

() 内は標準偏差を示す。 *** : $p < .001$

† 平均値は性別等無記入の被験者すべてを含めた値である。

には注意が必要であるが、その結果およそ次のようなことがわかった。まず、学生のもつ対教師態度は、認知的成分の「教師としての望ましさ」の因子や感情的成分でやや肯定的な回答がみられるものの、総じてネガティブなものであることが見出された。特に行為傾向成分では、現実面での接触の機会をほとんどもっていないし、願望でもニュートラル・ポイントを超えていない。これに対し、教師は学生がもっている態度をより肯定的な方向で推測している。特に行為傾向成分に関しては、学生との間に大きなギャップがみられた。これをもって直ちに、教師の見方は甘いと言断するつもりはないが、もう少し実態を直視していく必要がある。

では、教師—学生の望ましい人間関係が形成されるには、どのような方途を考えたらよいのであろうか。態度の3成分のうち、最もその変容が難しいとされる感情的成分は、やや肯定的な方向にあるので、問題は極端にネガティブな行為傾向成分である。このため、本研究では調査されていないが、教師の側が学生とどのような接触関係を望んでいるのかについても明らかにし、学生との接点を見出していくことが必要とされよう。

また、本研究で特徴的なパターンを示したD短大のような特定の大学における教師—学生の間関係を、ケース・スタディ的に検討していくのも有効であろう。さらに、学生が大学教師に期待するものは、それ以前の教師に対するものとは大きく異なると考えられるので、中・高生における教師—生徒関係と大学におけるそれとの質的な差異について検討を加えることも今後の課題といえる。

文 献

- 菊池章夫 1972 「理想的教師像についての一資料—Q-typing による検討—」 教育心理学研究, 20, 184—189.
- 永井陽之助 1968 柔構造社会における学生の反逆
中央公論 学生問題特集号 中央公論社
- 野村庄吾, 岡本夏木 1973 「現代青年と教師—現代高校・大学生を中心として—」
- 依田 新他 (編) 『現代青年心理学講座 3, 青年期の発達の意義』 金子書房 123—163.
- 田中教育研究所 1970 今の子どもは教師をどう見ているか—その実態 教育心理研究, No. 13, 5—36
(1982年7月31日 受稿)

INTERPERSONAL RELATIONSHIP BETWEEN COLLEGE STUDENTS AND THEIR TEACHERS (I)

Masao OHASHI, Toshikazu YOSHIDA, and Tomohide BANZAI

Two studies were conducted. In the first study, seventy hundred and eighty undergraduates from six universities were given a questionnaire to assess their relationships toward their teachers. Interpersonal relationship was here defined as interpersonal attitude composed of three components — cognitive, feeling, and action tendency. Selecting three of their teachers at random, students rated each of them on 52 scales.

In the second study, 1053 teachers belonging to eight universities and colleges, including the six used in the

first study, were sent a questionnaire by mail. They were asked to infer their students' average responses on the 52 scales, if their students had participated in the first study. Five hundred and fifty three teachers responded.

Major findings obtained are as follows:

1. For cognitive components, factor structure obtained from teachers' data was closely similar to that obtained from students' data. In the both cases, four factors were extracted, which were interpreted as "social accessibility", "desirability as teacher", "academism", and "authoritarianism", respectively.

2. Eight items in the feeling component was composed of a unitary factor positive vs. negative.

3. As to the action tendency components, two factors were extracted from students' data - "actual contact", and "desired contact." From teachers' data, on the contrary, four factors were extracted - "enjoying available informations,", "superficial contact", "utility", and "intimate contact."

4. The three components of students' attitude toward teachers were consistent with one another, with negative implications in their direction. Those as they were inferred by teachers were consistent, too, albeit with rather positive implications. Discrepancy between students' attitude toward teachers and that as inferred by teachers was especially remarkable in "social accessibility" factor of the cognitive component as well as in the action tendency component.